「航空と気象 ABC」

加藤　喜美夫著

成山堂書店（1993年2月）発行
262ページ　　3,600円

航空気象に関する一般的な専門書で比較的よく知られているものは僅か数冊で，しかも著者は総べて「気象業務として航空気象情報を提供する立場即ち気象庁サイドの気象専門家」である．しかし，表題の「航空と気象 ABC」の著者は「気象庁から提供された航空気象情報を利用して航空機の運航に携わってきた航空会社の気象専門家」なのである．ここに本書の大きな特徴がある．ノース・ウエストと全日空で長年にわたり運航管理の立場から航空と気象の関わりを凝視してきた著者が同じく地球物理学専攻の仲間であっても気象庁の専門家とは趣を異にした気象の心像を持つのは当然で，それが本書の特徴の興味ある彩りとなっている．一方，飛行機に乗るということが日常化し，それと共に航空気象の重要性が益々増大している現在，航空気象の専門書が久し振りに発行されたことは誠に時宜に適うもので，航空気象に関係する方はもちろん，広く一般の方にも一読をお奨めしたい．

さて，本書の内容であるが，著者は序章「航空と天気」で，気象を専門業務としない航空人のために，航空と気象の関わりを考える糸口の基礎として，航空機の運航に必要な気象知識の土台作りを試みたとしている．そのため，気象に関する詳しい学問的な説明は一般気象学の専門書などに譲り，参考書名は巻末の付録の次の「参考書」に挙げられている．また各種航空機の運航に関する具体的な知識はいわゆるマニュアル類に属すべき事柄として省かれている．序章に続く第1章から第10章にかけて，大気，温度，気圧，標準大気，風，水分，天気—大気現象，視程，気団，前線の10項目が航空に密接に関わる気象学の基礎知識として要領よく解説されている．次に第11章から第14章にかけて，観測施設と測器，気象図，予報，通報の4項目が運航に必要な気象業務上の基礎知識として丁寧に説明されている．終わりに，付録，参考書(リスト)，索引がある．付録には航空機の分類，温度換算表，国際標準大気，ビューフォート風力階級表，速度換算表，雲の種と変種，国際気象通報式の7項目が収められている．索引は和文索引と欧文索引の二本建てになっているが，これは英文で書かれたマニュアル類を読む人にとって非常に便利である．

ところで，本書では高・低気圧が独立した章ではなく，第9章気団と第10章前線の中で扱われ，台風は省かれている．台風については現在では一般にも早々とテレビを通じ気象衛星の画像などで分かり易く表現された情報が周知されるため，運航管理や飛行監視の組織を持たない航空機が台風域内に迷い込むことはない．「台風域内に安全な飛行コースは存在しない」という鉄則に従う限り，本書のような気象書で台風の解説を省略するのも一つの見識と言えよう．しかし，誰もがそう理解するとは限らないので，適当な箇所に省略の主旨を簡単に注記して置いて欲しかった．

さて，著者は長年にわたる実務経験に基づき，航空と気象の関わり方を飛行の安全との兼ね合いで整理したいという夢があり，その想いを本書に盛り込んだとしているが，それを更に発展させたいとの意欲が随所に感じられる．是非そうあって欲しいので，今後の発展を期待し，若干の注文をつけて書評としたい．

本書の題名「航空と気象 ABC」は ABC の掛り方で「航空と｛気象 ABC｝」と「｛航空と気象｝ABC」の二通りに読める．前者は「航空に必要な気象の基礎」，後者は「航空と気象の関わりを考える初歩」を意味する．どちらも著者の意図するところで，両者が綾に織り込まれているため，手元に置いて便利に使えるハンド・ブックのような利点が光っている．しかし，それだけに「Wonder?」を刺激する学問的な色彩が見えにくい．もちろん，航空気象のような実務性の強い応用分野では技術的・業務的な色彩がどうしても強くなるので，学問的な色彩を求める方が無理であることは充分承知しての注文である．因に，ここで「学問的」とは必ずしも「理論的・研究的」を指すのではなく，「不思議なことは不思議だとする意味合い」である．今，改まって晴天乱気流やマイクロ・バーストを例に引くまでもなく，航空機の発達や観測技術の進歩によって，それまで全く知られなかった現象が数多く発見され，それらについての学問的関心の結果が気象学の内容を豊富にすると共に飛行の安全にも大きく貢献してきたことは周知の通りである．しかし，それらの中には未解明のものや，それが航空ならではの現象なのかどうか，あれやこれやと不思議さを残しているものも多い．航空と気象の関わりについて大方の学問的関心を高め，航空気象学の一層の進歩を促すためにも，著者の貴重な経験が「航空と気象 XYZ」へと発展することを期待して止まない．　　（元気象庁，股野宏志）